

## 新たなミュージアムに関する基本計画懇談会 個別ヒアリング実施結果（摘録）

- 1 日時 令和6年1月26日（金） 午後1時00分～2時00分
- 2 開催方法 オンライン会議システムを活用して実施
- 3 対象者
  - (1) 委員 佐藤委員
  - (2) 事務局 市民文化局市民文化振興室：井上担当課長、篠田職員
  - (3) 関係者 株式会社トータルメディア開発研究所：納氏、下島氏、杉山氏
- 4 公開・非公開の別 非公開
- 5 意見聴取
  - (1) 新たなミュージアムにおける事業活動について
  - (2) 新たなミュージアムの施設整備について
  - (3) その他

※令和6年1月19日（金）に開催した第3回新たなミュージアムに関する基本計画懇談会と同様の資料を用いて意見交換を実施

### 6 実施結果

#### (1) 新たなミュージアムにおける事業活動について

- ・ 八戸市美術館では、例えば「市内にある民間ミュージアムのコレクションを用いて、市民と一緒に企画展の一部をつくる」、「企画展と並行した、学生たちの作品展示を企画する」など、“共創”というイメージで広い意味の市民協働の事例がある。
- ・ 八戸市美術館の展示室も、企画展示用の500㎡とコレクション展示用の100㎡の大きく分けて2つがある。コレクション展示用の部屋は、基本的にはコレクションを主体とした展示に使う想定だが、企画展示室があまり大きくないため、そこで収まらない場合にコレクション展示用の展示室も企画展に使用している。それゆえ市民からは「常設展示室はないのか」、「（観光的な視点で）地元のもの常にか置かれている状況を作れないのか」という声をいただいている。これを受けて、八戸市美術館の現在の企画展示室の運用では、2、3年に1回、コレクションをメインで見せ、それに加えて他館から借りた作品も展示する企画展を開催している。
- ・ 新たなミュージアムでも、八戸市美術館と同様の状況になった場合には、博物部門の常設展示を行ったり、博物部門の展示の最後に美術部門のコレクションを数点展示す

るなど、様々な方法があると思うが、「どれくらいのスケジュールで、このように展示室を使う」というイメージをしたうえで展示室の面積を設定すると、展示室の面積を小さくすることに説得力があってよい。

- ・ 「IN ACTION」で収蔵品を保管している様子を見せるツアーを行うなど、保管状況が見える化できると、新たなミュージアムの1つのビジョンである公開型収蔵庫につながる活動を「IN ACTION」が行っていることにもなり、双方の結びつきが明確になってよいのではないか。

## (2) 新たなミュージアムの施設整備について

- ・ 「収蔵・保管スペース」について、旧施設よりもダウンサイズする必要がある一方、すでにある収蔵品に加えて今後収集していくものがある状況で、面積を小さく設定することが問題視されると思われる。また、旧施設は細かく収蔵庫が分かれていたが、それゆえに建築的には通路が多くなったり、収蔵するためのスペースとして適切に使えないスペースが多めに取られてしまっていることもあったと思われる。それをふまえて今後の保管方法を考える際には、単に管理という意味での帳簿上のデータベースだけでなく、「どのように収蔵庫そのものを計画するのか」というように物理的な収蔵品管理方法を検討し、「面積は小さいが、このように収めれば以前よりも効率的に管理・収蔵できる」という考え方を計画できるとよいと考える。
- ・ 収蔵庫は、学芸員の高所での作業負担を考えても、天井高さを高くする発想は難しく、面積を大きくする必要があると思われる。
- ・ 今回「展示スペース」が小さくなることに伴い、必要になる展示のためのケースや什器類については、今あるものを継続して使用するのか、新しいものに変えるのか、などといった話が倉庫の面積設定に関係する。今あるものをそのまま移しては、倉庫は最初からパンクしてしまう。とはいえ、すべての備品を買い直す予算があるのかも不明である。新しい規模に合わせて、それらを移し替えるときの精査について検討する必要がある。
- ・ 八戸市美術館では、全体面積を抑えたうえで「ジャイアントルーム」という活動のためのスペースを大きく取っており、常設展示室という固定化したものは、面積というより運用の問題で設けていない。美術部門の常設展示室の面積が十分ではない点に対しては、新たなミュージアムにおいては博物部門の常設展示の中に美術部門のコレクションを展示する方法などにより、ある程度は解決できると考える。
- ・ 常設展示室を設けずに、全体を企画展のような使い方をするために、可動式の展示壁面を採用する場合には、その活用方法の検討が必要である。
- ・ 例えば、博物部門の展示や日本美術の展示には、展示ケースが必要となるが、現代美術のインスタレーションには、展示ケースも壁もない状態を要求される可能性がある。そのため、展示ケースが非常に必要な場合と、全く要らない場合があるが、設備がフ

レキシブルであるほど、博物部門から現代美術まで分野の振れ幅があるほど、展示ケースや什器類をどこに置くのかという問題が生じやすい。八戸市美術館でも、やむを得ずそれらを収蔵庫の前室に一時的に置くしかないときがある。

以 上